

県中教研 道徳部会だより

第 33 号

発行日 平成30年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 村井 幸喜
題 字 金山 泰仁 先生

生徒と共に学び進める道徳

指導主事 岡村 紀子

かつて中学校国語の教科書に、江戸時代の儒学者であり教育者である広瀬淡窓の七言絶句の漢詩が載っていました。今の大分県日田の淡窓の下に全国から若者が集まり、清貧な生活の中、学問を究めようと努めます。その中には、遠く故郷を離れた寂しさと苦学ゆえに心が折れそうになる若者もあり、その姿が漢詩の前半に描かれています。

師である淡窓は、最後の結句で叱咤激励する言葉を投げかけるのではなく、「君は川流を汲め、我は薪を拾はん」と共に体をかけて学問の道を進んでいこうと呼びかけます。決して丈夫ではなかった淡窓にとって、身を酷使することはつらいことだったと思います。このように教え諭すだけでなく、学ぶ喜びを分かち合おうとする師の姿に多くを学ぶことができます。率先垂範する彼の人となりは、「キミばあちゃんの椿（『私たちの道徳』）」でも紹介されています。

さて、これからの時代は、様々な価値観や言語、文化を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きていくことが今まで以上に重要になると言われています。生徒たちがこれからの時代を生きぬくための資質・能力を備えるために、「特別な教科 道徳」は大切な役割を担っています。人が一生を通じて道徳性を養っていくことは、生徒のみならず教師においても当てはまることです。生徒が、「考え、議論する道徳」を通して多様な他者と議論を重ねて探求し、お互いに納得できる解を得るには、教師が生徒と一緒に道徳的な課題に向き合う能動的な学習者（アクティブ・ラーナー）を目指すことが要となります。

平成31年度完全実施に向け、教師自らが生徒と共に自らの道徳性を養い、よりよく生きようという姿勢を大切に、日々の授業づくりや愛情をもった生徒への指導を進めていきましょう。

（東部教育事務所）

「特別な教科 道徳」に向けて

部長 村井 幸喜

私は、平成16年10月から3か月間、内地留学の機会を与えていただき、かねてからの願いであった当時関西学院大学教授であった横山利弘先生の下で道徳教育を学ぶ機会を得た。

この3か月間、横山先生の「道徳教育論」を拝聴したり、各種の道徳教育研究会へ参加したりして、自分なりに「生徒が主体的に学ぶ魅力ある道徳の授業」について探究することができた。横山先生の「道徳教育論」は、理論と実践的な内容が実にうまく結び付いたものであった。私のこれまでの学校現場での実践を思い起こしながら講義を聴いていると、納得できることばかりであり、すぐに明日からの道徳の授業に生かせると感じた。同時に、私の道徳の授業の反省すべき点が、多数見えてきた。まず感じたのは、私の資料の分析の甘さであった。「道徳教育論」の授業で配られた道徳資料の分析では、大学生の読みの深さに感心させられる場面が多かった。

また、「学校教育学研究演習」という大学院生のゼミでは、熱心に道徳教育の修士論文に取り組む院生の姿に感心するとともに、自分の研究に没頭できることにうらやましさを感じた。そのゼミで、道徳教育の根底には教育哲学や倫理学が存在することを知り、その奥深さに驚きを覚えた。

平成31年度から、道徳が「特別な教科 道徳」となる。各学校では、道徳の教科化に向けて準備を進められていると思うが、まず大切なことは、私たち教師が、道徳的価値について深く理解することではないだろうか。教師が子供たち以上に道徳的価値について理解し、子供たちの考えを導いていくことで深く考える道徳となるのではないか。そのためにも、私たち教師は、これまで以上に教材分析をしっかりと行い、授業で教材のどの部分を取り上げ、どう発問するかを熟考していなくてはならないと思う。（氷・西部中）

第61回 研究大会報告

東 部 地 区

滑川市立滑川中学校

東部地区研究大会では研究主題を踏まえ、3学年で3つの授業が行われた。

<第1学年> 藤井 翔太 教諭

主題 勤労の尊さ 4-(5)

資料 「午前一時四十分」

84歳になりなお働き続ける母の姿を通して、働くということの本質にせまる題材である。生徒は、受容的な雰囲気の中で活発な意見交換を行っていた。

部会協議では、効果的な問い返し発問や板書、ワークシートの活用法等について話し合われた。

岡村紀子指導主事からは、以下の助言をいただいた。

- ・教師自身が、研修を楽しみ活発に意見交換する姿勢をもつことが大切である。
- ・授業者は、生徒の発言を予想し構造的な板書を行えるようにしておくべきである。
- ・教師からの指名により発言させるだけでなく、生徒同士にも対話させることで、より話し合いを深めることができる。

<第2学年> 岩城 廣和 教諭

主題 正義を重んじる心 4-(3)

資料 「ひとりぼっち」

「いじめ」について、傍観者の視点から考えることで授業が進められた。「いじめのあるこんなクラスをどう思うか」という問い返し発問に対し、自分自身と重ねて考えた生徒からは、「よくないクラスだとは思いますが、自分もいじめられるかもしれないと思うと怖くて、何も言えないかもしれない」という本音が聞かれる場面も見られた。しかし、その思いも越え、被害者にとって、普段からそばにいて他愛もない話ができ、決していじめを許さない心をもった友人の存在が大切だと考え、そのように在りたいと願う生徒たちの様子が見て取れた。

田村千佳子指導主事からは、以下の助言をいた

だいた。

- ・教材研究がしっかりとなされていることで、生徒に学ばせたい内容がおさえられている。
- ・思いを発表した生徒がなぜそのように話したのか、その思いの真相をもっと聞けるような問い返しの発問を考える必要がある。



<第3学年> 雨宮 正洋 教諭

主題 自然への畏敬 3-(2)

資料 「ほっちゃんれ」

鮭の一生に見る自然の営みの厳しさや気高さから、ねらいに迫る題材である。「ほっちゃんれ」を映像で確認したことで資料の場面が理解しやすく、個からグループ、全体での議論という流れの中で、活発な発言が多くみられた。

部会協議では、中心発問後のまとめやねらいにせまるための生徒同士の関わり方等について、話し合いが行われた。

小田仁洋指導主事からは、以下の助言をいただいた。

- ・生徒同士で意見を出し合うには、教師がじっくり聴いて、生徒に語らせることが必要である。
- ・板書で生徒の発言をつなげていくべきである。
- ・教師の道徳性を生徒は見ている。日頃の言葉かけや振る舞いが大切である。

明野 淳子 (富・岩瀬中)

奥野 由子 (富・大沢野中)

金井悠紀子 (富・堀川中)

〔研究主題〕 集団や社会との関わりの中で、人間としての生き方を見つめ、共に豊かな心を育み、よりよく生きようとする生徒を育てる道徳の時間はどうあればよいか。
～道徳的価値の自覚を深める授業展開の工夫～

西部地区

氷見市立西條中学校

＜第2学年＞ 吉國 京子 教諭
主題 自己を生かし輝く集団 C-(15)
教材 「明かりの下の燭台」



学習発表会が近付いており、後期の生徒会活動の役割決めも行われているなど、「集団の中で役割を果たすこと」について考えることが最適な時期での授業であった。

導入で東京オリンピックの写真を提示し、生徒たちは関心をもって授業に取り組むことができた。また、中心発問では、付箋を活用したり、小グループでの話し合いを取り入れたりすることで、生徒がお互いの意見を交流する機会が保障されていた。

廣瀬孝子指導主事からは、以下の助言をいただいた。

- ・「考える道徳」とは、自分との関わりで考えるということ。「議論する道徳」とは、多様な考えに触れるということ。議論は英語の「ディベート」という意味とは異なる。
- ・付箋は書くことへの負担が軽減される。量や内容について確認をすることが大切。交流を行うのであれば、短い言葉で書き、理由等を尋ね合うとよい。
- ・グループは多様な考えに触れることができる。話し合いの進め方や付箋の位置付けを示し、ただの意見の読み合いにならないようにする。
- ・授業の中で、生徒自身の考えが変わった部分を取り上げる。「どうしてそう考えたのか？」など問い返しをして、いろいろな側面から捉えられるようにする。

河合 仁美 (南・利賀中)

＜第3学年＞ 本江信一郎 教諭
主題 きまりを守る C-(10)
教材 「二通の手紙」

導入で、事前に行ったきまりに関するアンケートの結果をテレビ画面に映し出し、学習意欲を高めた。資料を通し、入園係の元さんがとった行動によって起こった事柄について、元さんの心情の変化を考えた。補助発問「姉弟を探している間、元さんはどんなことを考えていたか」では、2人の子供に対する心配や、子供を探してくれている他の職員に対する申し訳ない気持ち、自分自身に対する後悔の念があったとの意見が聞かれた。中心発問「元さんが、晴れ晴れとした顔で職場を去っていったのはどうしてか」では、「今まで気付かなかった、新しく考えさせられたことは何か」と、更に問いかけることで価値に迫った。



小川直子指導主事からは、以下の助言をいただいた。

- ・中心発問を「なぜ」で問うことにより、価値をより深く考えさせることができる。
- ・求める考えばかり答えさせようとするのではなく、なぜそう考えたのかと問いかけ、より深く考えさせる。生徒の声によく耳を傾け、自分の思いを話せるようにする。
- ・教師が明確なねらいをもって、個人、班、全体の表現活動の内容と時間配分を設定する。
- ・評価の場面では、深く心に感じたことや納得できたこと、これからの自分に関わること等を書かせる。
- ・子供がその道徳的価値を、多面的・多角的に捉えるようにする。また、自分との関わりで捉えるようにする。年間35時間の道徳の授業を丁寧に行っていく。

天野 泰嘉 (砺・出町中)

授業力向上のためのアドバイザーによる講義〈要旨〉

第61回東部地区大会

「教育改革は道徳教育に何を求めるか」
～「特別の教科 道徳」の実施に向けて～

金沢工業大学基礎教育部教職課程
教授 白木みどり 先生

1 なぜ「特別の教科 道徳」なのか

日本の教育の目的である「人格の完成」を目指す上で、道徳教育はなくてはならないものである。生徒一人一人のもち得る可能性を見付け出し、引き出し、一人一人の人格の完成につながるような教育支援をしていく。それが社会的に自立して生きていく基盤を身に付けさせることになる。私たちは今後の未来社会に生きていくために、子供たちにこのような力を付けさせてあげなければならない。道徳は「特別の教科」になり、学校教育全体の要になる。そのキャッチコピーが「考える道徳」「議論する道徳」である。

2 「特別の教科 道徳」に対する教員の心構え

これからの道徳は、発達段階に応じたねらいを定めた教材分析をすることが大切。私たちは子供の自由な発想や考えをしっかりと受け止める授業をつくっていかねばならない。そのためには、子供たちの考えを引き出すために教員が教材分析をしっかりと行わねばならない。教員の固定観念や価値観に引っ張ろうとするのではなく、答えのない問いに対して多様性を出させること。それが、そのまま学級経営等につながる。道徳的価値を教員の枠にはめ込むのではなく、生徒が自由に発言できるのが理想的な道徳である。

3 「特別の教科 道徳」の目指すもの

多様な価値観のときに対立がある場合を含めて、個人又は社会の形成者としてよりよく生きるために、道徳的価値と向き合い、いかに生きるべきかを考え続ける姿勢こそが道徳教育に求められる。

道徳の授業では、子供たちの自由な価値観を形成するプロセスで、ねらいをもった授業で道徳的価値について思考経験を積んでいくことが大事である。思考経験が累積されることで、子供たちの中に良心が形成されていく。その場を設定するのが「特別の教科 道徳」である。

寺島 豊和（下・入善中）

第61回西部地区大会

「特別の教科 道徳」に向けた授業づくりと評価の工夫

日本道徳教育学会名誉会長

元関西学院大学教授 横山 利弘 先生

1 本領が発揮できる道徳を

間もなく教科化を迎えるが、変更点は検定教科書と評価の導入だけ。従来、読み物教材を基盤とし、授業を展開してきた。慌てる必要はない。

道徳には「タブー集」が多すぎた。多様な指導方法が教師に任されている。しかし、教師間で縛りをかけ、本領を発揮できないようにしている現状がある。

2 「ローテーション道徳」と評価

道徳授業は繰り返し行うことができないため、反省や課題をすぐに生かせない。「ローテーション道徳」によって、道徳教材を複数回実践し、授業力を向上させることができる。

評価については、生徒が元気になるよう記述する。複数の教師による指導体制を通して、一面的な見方を取り除くことができる。

3 「考える道徳」と「議論する道徳」

「考える道徳」とは、道徳的価値について「考える」ことである。道徳的価値に迫らず、登場人物の心情だけを追い続ける授業をやめる。教え込みではなく、生徒と共に考える。多様な意見を述べ合い、対話が生まれる。「議論する道徳」とはディベートに類するものではない。

4 教材の読みを深めること

中学校では、登場人物が道徳的価値と出会い、変容を自覚する教材が多い。ビフォーアフター型授業によって生き方の立て直しをする。どのような考えで立て直しができたのかを考える。道徳授業の醍醐味がそこにある。

5 道徳的価値の真の理解を

中学生は道徳的価値について、ある程度のことには知っている。道徳授業を通して深い理解ができれば、自分を見つめるようになる。生徒が主体的に発見し、納得できれば、即座に自分の生き方を振り返るようになる。

三國 大輔（氷・十三中）